

## 韓国の口承文芸の研究動向

— 85・3 説話の研究シンポジウムを中心に —

チエ  
崔 仁 鶴  
イン  
ハク

一九八五年三月開催された仁荷大学主催の〈説話の研究〉シンポジウムを中心に、執筆依頼があったのでそれにしがいが論じようと思う。実際、八五年度はごくわずかの説話関係論文しか見当らなかった。たとえば次のような論文がある。

洪慶杓「竜神説話とその象徴体系試攷」『韓国伝統文化研究』創刊号、暁星女子大学校

曹寿鶴「射琴匣説話研究」『人文研究』2号、嶺南大学校

キムドンウク「三国遺事」説話と時間認識の三様相」『陶南学報』

七・八輯、陶南学会

孫東仁「広州郡都尺面の伝来童話」『畿甸文化研究』14輯、仁川教

育大学

朴征世「犠牲伝説と犠牲観」『梅芝論叢、一輯』延世大学校

しかし、前から三つの論文は『三国遺事』に収められた説話の研究である。文献および国文学研究分野であると言えるのでここに論

評することは避けることにする。後の二つの論文、つまり孫、朴の論文は口承説話を扱った論文である。

孫東仁の論文は、ソウルの南に隣接した京畿道広州郡都尺面において昔話の採録を試み、内容を分析したものである。孫は論題を見てわかるようにもともと児童文学者であり、児童文学の方面から昔話を取り上げた論文がすでに多い。今回の論文もその例外ではなかった。彼は伝来童話が子どもの成長に大いなる影響を与えていることに気づき、早くから伝来童話の研究に立ち入って採集調査を進め、今回の報告がその十五回目であると自ら示した。

ここに孫の以前の業績に触れるひまはないが、今回の論文を読んだ感じた点は、基礎的な問題ではあるが、広州郡都尺面をフィールドに設定した積極的な理由について明らかでないということ。さらに話者のデータに全く触れていないということである。論文の目次が示している通り、この論文はただの資料集ではない。内容の分析までこまかく行われているから当然話者についても明らかに示す必要がある。言うまでもなく話者の階層および職業などによっても話の内容が相違して来るからである。また一つは都尺面がソウルに近接している関係上、ソウル文化圏のはずれであるということ念頭におくならばまずソウルと広州の地理的關係と生活文化の背景も考慮する必要があるう。

朴征世の論文は人身御供の研究である。口承説話から人身御供モチーフが濃い七つの類話を取り上げ Encyclopedia Britannica にある sacrifice 項目の中から次の六個原則をとりあげ、それに韓国の資料の適応を試みた。

- ①誰が犠牲を捧げるのか。  
 ②なにを祭物として捧げるのか。  
 ③いつ、どこで捧げるのか。  
 ④どのように犠牲するのか。  
 ⑤誰に祭物を捧げるのか。  
 ⑥なぜ祭物を捧げるのか。
- 朴は人身御供譚の構造と犠牲観にも触れ結論として次のように論じた。韓国における人身御供譚を説話の内容から考察して、おおよそ次のような区分が可能である。①川沿いに接した耕作地の生命線である堤防修築の困難さ。②内地地方住民たちが経験する獣からの被害さ。③海岸地方住民たちが経験する風浪からの被害を避けようとする意志などがこの系統の話に潜んでいるということである。さらに朴は話の展開構造について、①災難解消のため人身御供を行なう。これを原初型伝承という。②災難を予防するため毎年祭物を捧げて来たが、その災難の主体を退け、やがてこの風習は無くなるという。これを発展的完決型と名付けている。この二つの形式は共に伝承されていると論じた。
- しかしながら朴の論文は彼が最初から意図したある目的から書かれていたということがわかる。最初のところで彼はこう言っている。キリスト教の崇高たる犠牲的な愛の精神が民衆の意識として根をおろすためには、まず犠牲に関する民衆経験様態を把握して見る必要がある。なぜならば民衆の意識とは、いつも歴史的経験の伝承によって習得するからであり、その歴史的経験とより関係のある事象とは〈伝説〉であると断定し、それから人身御供譚を集め分析を試み

たのだという。結局、彼は結論で韓国民族の犠牲意識とキリスト教のそれとの接点をいかにつなぎ合わせられるかという動機がこの論文に濃く現われているのが一つの脆弱点でもあろう。また先程触れた百科事典の sacrifice にある六項目の原則にそれぞれ韓国の資料を当てはめ犠牲様態をさぐるうとする試みは、どうも不自然な感じがする。そのような図式に当てはめるだけでは西洋との類型対比にはなるけれども、それよりは韓国の祭りの実態をとりあげ犠牲が祭りに占めている機能と構造をさぐられた方が適當ではなかったかと思ふわけである。

仁荷大学校人文科学研究所主催の〈説話の研究〉シンポジウム(85・3・21〜23)には韓国から一〇名、日本から一〇名、米国一名、合計二一名の学者が参席し、三日間にわたる発表と討論が展開された。米国の一人はR・J・アタムスで彼は現在日本に滞在し、発表の内容も日本の資料を中心に比較しているから、結局この会合は韓国と日本の共同発表会の性格が強いと言える。

全体から見たとき内容をおおよそジャンル論、構造論、比較研究などに分けられるが、実際はしっかり収まらず、主題別に分けることは無理であろう。一応、全体の様子を知るために発表者と発表論題をあげることとする。(発表順)

三月二十一日

趙東一(韓国精神文化研究院)

「韓国説話研究の現況」

松前健(立命館大学)

「日本古代の神話の諷諭方式と機能」

林在海 (安東大学)

「存在論的構造から見た説話分類」

金和経 (嶺南大学校)

「韓国説話の土着的ジャンルに対する考察」

任哲宰 (韓国文化人類学会長)

「グロンドンドン・シソソビ説話 (蛇掣型) とキュー

ピット・サイキー説話との対比」

張鎮吉 (弘益大学校)

「ヨーロッパの竜退治説話」

福田晃 (立命館大学)

「ジャンル論研究——日本昔話の成立をめぐって——」

依田千百子 (郡山女子大学)

「韓国の巫俗神話と日本の中世神話」

三月二十二日

山下欣一 (鹿児島経済大学)

「日本説話研究の現況」

成者説 (仁荷大学校)

「累積譚の韓日比較」

R・J・アタムス (宮崎医科大学)

「日本とアジアにおける猿蟹譚」

熊谷治 (九州歯科大学)

「東アジアの流れ島伝説について」

松原孝俊 (大阪芸術大学)

「致富譚に関する二、三の考察」

小松和彦 (大阪大学)

「日本説話における異類の構造的位位置」

樋口淳 (専修大学)

「他界と共同体」

崔雲植 (国際大学)

「孝行説話に現われた伝承集団の意識」

崔来沃 (漢陽大学校)

「韓国風水説話の受容意味」

三月二十三日

曹喜雄 (国民大学校)

「トリックスター譚の史的小考」

崔仁鶴 (仁荷大学校)

「トケビ遡源考」

荒木博之 (広島大学)

「昔話と文化 (昔話の比較)」

小島瓊礼 (琉球大学)

「昔話の意味の読解」

韓国の学期は三月一日からはじまる。この会がちょうど学期初頭に当たって多くの学者が参加するには不都合だったが、それでも毎日二〇〜三〇名の学者が同席してくれたのは説話学に対する学界の関心がそれほど高まっているということであろう。おのおの二〇分ずつの発表時間に一日二時間ずつの討論時間ではどうしても時間

が足りなかったので残念であった。しかし主催側の配慮で演じられた和順地方の巫儀―シッキムグツが最終日の午後に組まれ夜八時まで行われた。皆は巫者と祈願者の関係になり、まるで神に憑かれたかのように熱気が盛り上がったのはたしかに一つの成果ではなかっただろうか。

今回のシンポジウムは前述した通り、韓国と日本の口承文芸研究の状況を知ろうとしたうえでお互い交流したことになる。韓国からは趙東一、日本からは山下欣一がそれぞれ自国の説話研究の動向について発表した。

では韓国側の発表内容について発表者順に紙面が許す限り一言ずつコメントして行くことにしよう。

趙東一は説話研究の基礎作業として、文学であり、民俗である説話自体の理解体系を整えるのがなにより緊急な課題であると主張しながら金烈圭外共著の『民談学概論』(一九八二)、崔仁鶴の『韓国説話論』(一九八二)などがそれに対応した論著ではあるが、まだ確固たる土台が整えられたとは言えないとほめかけた。趙は自らの『韓国文学通史』に説話の文学史的位置と機能について可能な限りこのことを触れようと努めたと言いながら民俗学からも民俗学的研究が成され、説話の歴史的な変遷がうかがえられるよう努めるべきだと主張する。彼はまた説話の移動と変異を扱うのにどうしても分類の作業は進めなければならないと言ひ、分類の作業はあらゆる説話研究の先行課題でもあり、その解決の方法として、アアルネ・トンプソンの類型を受け入れ、韓国の資料に合うよう修正する立場もあると言ふ。崔仁鶴の『韓国昔話の研究』(A Type Index of Korean

Folktales, 1979) がつまりそのような発想を具体化したものであり、曹喜雄の『韓国説話の類型的研究』(一九八三)も神話・伝説を含め包括した独自の分類案を示した論考であるが、両方ともアアルネ・トンプソンの分類自体が持っている問題点を根本から再検討したとは言えないと指摘した。趙自らの分類の構想については次のように述べている。つまり、説話の基本存在様相を対立的な構造として把握し、上位類型の体系を樹立すること。なお資料を実際に分類して得られた結果によって、その体系を修正しつつ過程を繰り返しながら演繹的かつ帰納的で、理論的でありながら実証的な尺度を生み出すよう試みるのである。

趙は引き継ぎ「解釈の視角と理論」についても文学研究の側面から最近発表された論文をあげ批評した。たとえば小説の根源説話を追究した張徳順の『韓国説話文学研究』(一九七〇)、説話自体に対する文学的理解をより深化しようとした成者説の『韓国民譚の世界』(一九八二)などである。趙は自らの論文「人物伝説の意味と機能」(一九七九)について次のように説いた。それぞれ相違する隣り村で、同一人物に関する伝説がいかにか生成されて来たのかを調査したものであり、現場論的研究と構造主義的分析における両極端を是正し、説話に対する歴史的研究まで含め、包括した新たな理解を求めようと試みたのであると。

林在海は説話の定義について、ある内容に関する個人か集団の意識を話の形式をそろえて表現したものであると一応規定し、ここでもっとも重点になる概念は〈意識〉と〈表現〉であり、かつ〈意識〉と言うのは話の内容をいかに受け入れたかという話し手と聞き手の

受容態度を限定して意味したものであるといった。したがって説話の主題と素材は雑多、多様であるから存在論的構造の分析単位にはなるまいと主張しながら対立的な構造によってこそ体系化が可能であり、説話の形成と伝承の基盤になる〈意識〉を中心に分類を論ずるのがより論理的であるという立場をとっている。

金和経の発表は、これまで通文化に適用、可能な分類体系に該当する三分法（神話、伝説、民譚）を用い、韓国の説話をすべて分類することは不可能だと主張しながら韓国説話の土着的なジャンルは一分法こそ可能であると主張した。もしこの見解が妥当であれば今後の研究では一分法の韓国説話が持っている独自性を認め、それを踏まえた包括的分類の基準を設けるべきだと強調した。

任哲宰は韓国のグロンドンドン・シンソビとキューピット・サイキーとの対比を通し、叙述様式、使用語句、補助人物登場などをそれぞれ指摘したうえで結論として次のように述べた。つまり、両方は人間と神との交婚譚を内容にしている説話である。また両方とも共通因子があまりに多く、同一話の類話であると言える。それにもかかわらず両説話を同一の説話としてみなすことがちゅうちょされるのはなぜだろうか。それはヨーロッパの話は人間を神界に上昇して幸福を営むのに、韓国の話は人間でない存在者を人間界に留めさせ幸福を営んでいるということが指摘できる。言いかえれば前者は現実界を否定し脱出する形式、これを霊界希求説話と言い、後者は霊界を否定または無視する形式、これを現実肯定説話だと区分けた。

張鎮吉は、ヨーロッパにおける竜退治説話（Das europäische Drachentötermärchen）について発表し、内容の展開、叙述登場人

物などについて解釈を求めて発表した。

成者説はいわゆる韓国の〈叢しべ長者〉型説話を日本、印度、フリッピン、フランス、ブルガリア、イギリス、ジブシなど幅広くその類話をあげ対比しながらこの系統の話を印度の「Purāna」に遡源を求め、仏教伝来の経路をたどって中国、韓国、日本に伝承されたこと、この話が仏教と切りはなして考えられないと主張した。

なおヨーロッパにも類話があり、その世界性が認められるがフランスとブルガリアにおいては特殊な結末部分が認められ、これはおそらく戯画化したものであると考えた。

崔雲植は親孝行を主題にした説話の中核を成す犠牲性孝行説話、孝行異蹟説話、孝行感虎説話をとりあげ孝行説話の基盤を成す思考はいかなるものであろうか、孝行異蹟の表出様相はいかなるものであろうか、さらにこれらが用いる意味と原因はなんであるか、最後に孝行観念の形成過程についてそれぞれの説明を突き止めようと思みた。とくに孝行観念が儒教思想をはじめ思想とか制度によって生じたのではなく、親と子の内面的自発性からであるとの発表は値いするものである。

さらに崔は次のように言う。親孝行の意識はカオス的な未分性を基盤にし、原本思考から発生したのである。韓国人が持っている伝統的思考の中には、おのれの子を分化された他の個体として認めようとならない心性があり、これは強い自己中心の未分性に基盤をおいているという。このような未分性は子をおのれの延長と見なし、子がおのれを継承、延長させおのれを永遠に持続させようとする欲求に発展する。さらにおのれと未分的関係にある親、祖父母、先祖を

重んじる孝行心に発展して行くのだと主張した。

崔来沃は韓国における風水地理説の概要にまず触れてから説話の中にある風水概念を抽出し、その受容意識について追求した。つまり韓国の風水説話には韓国人の幸福観、報償心理、人間性の表出と信仰心が含まれ、説話には風水の理論とは異なる人間的側面を興味深く、なお教訓的に示していることを論証した。

曹喜雄はトリックスターの語意から論じはじめた。古典からその事例をあげ、かつて多く普及されたことを指摘した。トリックスターは李朝末期の他の文学ジャンルにも多くの影響を与え、たとえば襄神将伝に登場する房子と愛娘からも、仮面劇に登場するマルトウキからもその要素がうかがえると主張した。

筆者の発表、トケビ溯源考は樹木信仰と妖怪の関連を中国と日本と対比させ、韓国のトケビは複合文化の要素が濃く、その重層性を究明することによって、まことのトケビ性格を知ることができると言う。とくにトケビの本体が木で出来た道具か、あるいは森や山奥と関連が深い点に注目し、このような視覚から研究する必要性を強調した。

以上、詳しく触れる余裕がないので大ざっぱに発表者ごと一言ずつコメントを加えただけで読者には大変申し訳ないと思う。この催しを企画した主催側の一人として強く感じたのは、説話が人間の心意を現わす口承文芸であるゆえにその伝播性も強く、お互いの比較研究がどの分野よりも必要であるということである。

(チェ・インハク／仁荷大学校文科大学)

## シンポジウム

### 「カレワラと世界の叙事詩」

大林 太良

フィンランドのエリアス・リョンロットがカレワラの旧版(いわゆる『古カレワラ』)を完成し、その序文につけた日付は、一八三五年二月二十八日であった。その一五〇周年を記念して、フィンランドでは、さまざまな行事が行なわれた。その一つが、トゥルク市において二月二十二日から二十六日まで開催された国際シンポジウム「カレワラと世界の叙事詩」であって、トゥルク大学と北欧民間伝承研究所(Nordic Institute of Folklore)の主催で、組織委員会の委員長はトゥルク大学、および同研究所のラウリ・ホンコ教授だった。

このシンポジウムには世界各地から三十人の発表者によって報告が行なわれた。日本からは大林が出席した。このシンポジウム終了後、ヘルシンキのフィンランドディア・ホールにおいて二十八日にフィンランド政府主催のカレワラ一五〇年祭式典が催され、日本からは大阪外大の小泉保教授と大林が列席した。

さて、シンポジウムに話をもどすと、この標題にふさわしく、世界のさまざまな叙事詩がとり上げられた。カレワラ自体についての